

A stylized illustration of a red blood cell, depicted as a large, rounded, reddish-orange sphere with a textured, slightly wrinkled surface. The cell is centered in the upper portion of the frame. Inside the cell, the Japanese text '血の未来' (Future of Blood) is written in a dark, serif font. The background is plain white.

血の未来

## 血の未来

---

「ん？」

私は答案用紙に違和感を感じて、眉をひそめた。何枚も見てきたせいで、疲れが出たらしい、と思ったのだが……。

今日も窓の外には粉雪が降っており、電気がろくに来ない部屋は夜のように暗い。まだ終業時間にもなっていないのに。風が遮断されているだけマシンだが、足下に小さなストーブが一つあるだけの室内は氷のようで、底冷えしていた。

私が見つけた“違和感”は、マークシートに塗られている色が黒ではない、という規約違反だ。私は眼鏡をくいと直したが、それで色が変わるわけでもない。やっぱり赤い。正確には、赤茶か。レンズの歪みが原因でもないらしい。

私が眼鏡を使って、もう何年になるだろうか。まだそんなにひどく視力が悪いわけではないのだが、度が合わなくなったらしく、文字がぼやける。買い換えたくとも、大学の試験官という立場でさえ眼鏡は高額で、しかもすぐ手に入るとは限らないので、私は唯一無二の眼鏡をとても丁寧に使っている。

鉛筆だって、そうだ。

タリバンが去り、ある程度生活が自由になったとは言え、このアフガニスタンの物資は、まだまだ乏しい。普通の黒い鉛筆も貴重品だ。今、このマークシートに使われているような赤い鉛筆もしくは赤ペンは、もっと高級である。

彼女は知らなかったのかな？ と私は思った。

用紙に書かれている名前は、女性のものだ。女性が大学入試を受けられるようになったのは、実に20年ぶりである。高校に通うことすら許されなかった彼女らは、家で、独学で勉強し今日に臨んでいる。だから黒の鉛筆を使うようにという試験要項を、彼女は知らなかったのかなと思ったのだった。

だが、勉学の環境すらない状況から今日の試験に辿り着くには、並々ならぬ努力があったはずなのだ。時間を切り詰めて図書館に通い、稼ぎを切り詰めて本を買い、仕事も家事もを切り詰めて学んだ。今の国に、悠長に勉学をだけに励める人間などいない。ましてや女性なら、なおさらだ。

私は窓からの明かりに透かすようにシートを持ち上げ、顔を近づけた。眺めてみて——愕然とした。

「血か！」

シートの一点一点が、血で書かれていたのだ。

しかもシートの欄外には、不要なコメントまで書かれていたのだ。短く、すみません、と。『すみません黒の鉛筆が折れたため、血で書きました』と。

私は思わずその用紙を放り出しそうになってから、ハタと気づき、用紙をゆっくり机に戻した。胸に手を当てて、一瞬荒くなった呼吸を正す。

そうなのだ。年に一度きりの、しかも彼女にとっては人生で最初にして最大の正念場のはずなのだ。きっと彼女は、この日のためだけに何ヶ月も何年も……いつかこの日が来ることを夢見ながら、勉強を重ねてきたはずである。女性が大学を受験できる——この幸運が実現するかどうかわからなかった暗黒の日々の中で。一丁一日で「受けてみよう」と気軽に思えるほど、大学の壁は低くも薄くもない。

そのように大切な日の大切なシートに、指定された黒の鉛筆を持ってきていないわけがない。試験要項なんて、何度も確認したことだろう。

シートの記載を辿っていくと、赤色に切り替わる辺りで2カ所、きつくマークされて撥ねたような跡があった。それより前に塗られている分は、黒の鉛筆だ。バチンと撥ねた2カ所は、レ点かV字の派手になった風なマークと、1のように見えるマーク。それを赤いインクが補って、レの形に仕上げている。

どうやら彼女は2本の鉛筆を用意しながら、そのどちらをも、力の入れすぎで折ってしまったものと想像できる。鉛筆を削れなかったのだろうか？ 確かに試験官が受験生に鉛筆削りを貸し出したりなどは、したことがないが。

試験会場は寒かった。

この部屋など比べものにならない、極寒の地だった。その気温マイナス6度。……マイナスである。

受験開始の時間にも遅延が出てしまった。1時間半待たせてしまった挙げ句、マイナス気温の部屋にて、4時間の長丁場だったのだ。

椅子に座ったまま、動き回することは許されず、手をさすってみても感覚は戻ってこないものである。いかにマークを塗るだけの単純な作業とはいえ、手はかじかみ、頭も思うように回転しなかったに違いない。そして力加減を間違えた彼女は——鉛筆を失ったのだ。

どんなに、悔しかったであろう。

書き直しのしかない血のマーキングは、一粒一粒、慎重に塗られていた。

教室にいた監督官は、彼女に予備の鉛筆を渡さなかったのだろうか。渡せなかったのだろうか。確か予備が用意されていたと思うのだが、私は試験会場を見ていないので分からない。それとも、彼女は試験官に申告することを思いつかなかったのだろうか。分からない。推測の域は出ない。しかし。

彼女は懸命に、試験を続行させる術を考えたに違いない。ひょっとすると今マークを塗ってあるこの鉛筆だって、歯で木を削って芯を出して書いたのではとも考えられる。

何としても彼女は、諦めるわけに行かなかった。未来がかかっているのだ。自分の能力不足で落第してしまうならとにかく、このようなアクシデントで今までの努力を無駄にするわけに行かなかったのだ。

そして彼女は、インクとして使えそうな、唯一の液体に気が付いた。

鉛筆の先に血を付けるなどして、インク代わりに書いたのだろう。

どこの血を流したのだろうか。指先と考えるのが妥当だが、指の腹に鉛筆を出したって、これだけのマークシートを埋め尽くすには、かなりの量が必要だったはずだ。小さな傷なら、すぐ血は止まる。マークを塗るたび、指先を絞って血を出し、鉛筆につけて書き落としていったというのか。

一つ一つ。

慎重に。

文字も、絵も、記号すら使われていないのに、それは強烈なメッセージを私に伝えた。

私は試験会場に行かなかった自分を悔やんだ。恥じた。私がこれから学問を伝えるべき若き面々を、真摯だっただろう面持ちを、どうして直に見ておかなかったのだろう。忙しかったからなど言い訳だ。家事と勉学と戦争のさなかを生き延びてきた彼らに比べれば、私の佳境など取るに足らないものだろう。

それほどに、受かりたいのだ、と。

もう後がないのだと。

大学へ入ること、それだけを考えて。

視界がぼやけた。

涙が頬をつたう。

想像すればするほど、涙が溢れ出た。

私は涙を用紙の上に落とさないように顔をそむけ、膝の上で強く拳を握りしめていた。

心中で、血を流し続けて試験を受けたのだろう身の知らぬ彼女に向かって、何度も何度も謝った。

暗黒の日々。辛く、悲しかった日々。

毎日、今日はどこがやられた、何人が死んだと放送が流れた。人々のうめきが、轟音が耳をつんざいた。土埃と熱が私を覆いつくし、絶望感を植え付けたものだった。いつ終わるとも知れない戦いの終結は自分が終わることではか平穩になれないのだろうかと思ったこともある。自分が次は我々の番ではないかと、誰もが怯えた。戦争と関わりのない土地など、なかった。

ようやくカブールに差した雲間の光を、掴むため――。

執念の答案用紙なのだ。

試験方法はマークシートだが、答え合わせは機械ではない。私は深呼吸するとハンカチを出して、しっかりと目を拭い、一つ一つ慎重に解答を確認していった。ストーブに乗せてあるヤカンが沸いて、水蒸気を噴き上げている。頑張っ部屋を暖かくしてくれている。大丈夫だ、私の指は動いている。ちゃんと採点をするさ。

もうすぐ暖かくなり、花も咲くだろう。